

鹿児島方言の疑問文音調について

—— 動詞述語文のアクセントと韻律の関係 ——

太 田 一 郎

【キーワード】 文末音調, イントネーション, 韻律変異, アクセント, 韻律への制約

【要 旨】

鹿児島方言の新しい疑問文イントネーションと言われる昇降調が広がっているかどうかを音声聴取実験によって検証した。その結果, A型動詞述語文では上昇音調を, B型動詞述語文では昇降音調をとる傾向があり, 真偽疑問文の文末音調は述語のアクセントとの関連で決まる性質を持つことが示唆された。また, 疑問詞疑問文ではA型述語文, B型述語文の両方で上昇音調が好まれることが分かった。最後に, これらの結果から疑問文の文末音調出力への制約というより一般的な形での記述が可能であることを示した。

1. はじめに

日本語の文音調の研究は標準変種に関する研究が多数を占め, 地域方言の文音調のシステマティックな研究はそれほど行われていないようである。いわゆる尻上がりイントネーションや半疑問イントネーションなど若年層の音声現象の全国的伝播という観点からの研究も興味深い, 地域方言の文音調体系の中でこれらの音調がどのように位置づけられるのかという問題を考えなければ, 単なる共通語化・東京方言化のひとつとして片づけられてしまう危険性がある。また, 文音調の体系的研究が行われなければ, 韻律面での変異が言語的・社会的にどのような意味を持つのかを議論することもむずかしくなる。そこで本稿

は、若年層の鹿児島方言話者たちが使用されている疑問文の「昇降調」(木部・久見木1993, 木部2000)を手がかりに、若年層方言の疑問文に見られる文末音調の型を決める要因について、音声聴取実験の結果から考えてみたい。なお、本稿では文末詞なしの疑問文のみを考察の対象とし、文末詞付き疑問文の音調については言及しない。

2. 鹿児島方言の疑問文の音調

2.1. 先行研究：昇降調の広がり

木部(2000)によれば、老年層の鹿児島方言では、疑問文は文末詞ナ、ヤ、カをつけて下降音調で、ケをつけた場合は上昇音調で発音されるのが普通だと言われている。¹⁾しかしながら、若年層方言では、これらの在来文末詞はほぼ消滅し、ケ以外の文末詞が疑問文で使われることはなくなった。ただし、若年層方言の特徴は、ケだけが疑問文で使用されるということだけではなく、たとえば(1)のように、文末のケの部分で音調が上昇して下降する昇降型の音調が用いられる音声的特色も見られる。木部はこの音調を「昇降調」と呼んでいるが、くわえてこの音調が(2)のノダ疑問文や(3)の文末詞のない疑問文(以下ゼロ文末詞文)でも用いられる例があることから、上昇、下降に次ぐ第3のイントネーションとして認める必要があると主張する。

(1) アシ[タ]ヤス[ミ[ケ]ー

(2) [モー]シゴ[ト]ワスン[ダ[ノ]ー

(3) [モー]シゴ[ト]ワスン[ダ]ー (木部2000:110-1)

([は音調の上昇を,] は下降を表す。)

2.2. 問題の所在

若年層の談話を聞いていると、たしかにケ付きやノ付きの場合には、上がって下がる音調が共起するケースが多いという印象を受ける。鹿児島方言は、音韻論的にはアクセント付与の領域内(たとえば「名詞+格助詞」など)の最終音

節から二番目の音節が高くなる A 型と最終音節が高くなる B 型の二つのアクセント型を持つと言われるが、木部の言うように、もし昇降型音調が第 3 のイントネーションとして確立し、ゼロ文末詞文にまで広がっているのであれば、述語の品詞やアクセントの型に関わりなく文末にかぶさる音調として広がっている様子が観察されねばならないはずである。しかしながら、木部は若年層話者が昇降型の音調をゼロ文末詞文でも使用すると述べるにとどまっており、昇降音調の使用がどのように広がっているかについては明らかでない。この音調に関する論考は木部・久見木（1993）が初出だが、最初の報告からほぼ十年が経過しようとしている今、若年層の間にどのように広がりを見せているかという問題は興味深い。そこで本研究は、当初若い世代を中心に昇降音調の広がり現状をとらえることを目的としていた。ところが予備調査の段階で、実はゼロ文末詞文で昇降音調が使いにくい場合があることがわかった。述語部分のアクセントが A 型の場合である。

3. 調 査

3.1. 予備調査

予備調査では、当初「見る」(B 型)、「する」(A 型)、「作る」(B 型)、「歌う」(A 型) の 4 つの動詞を、それぞれ現在形、過去形、可能現在形、可能過去形の 4 種類の活用形にして「何か ____ (たとえば、「何か見る」)」という真偽疑問文を作り、大学生の鹿児島方言話者 8 名 (男性 4 名、女性 4 名) に数回読ませて録音し、昇降型音調の音声特徴を記述しようと考えていた。²⁾ 筆者は A 型アクセント動詞の述語疑問文 (以下 A 型文) も B 型アクセント動詞の述語疑問文 (以下 B 型文) のどちらでも昇降音調が現れるのを期待していたのだが、B 型文では昇降音調は問題なく使われるのに対して、8 名全員が A 型を昇降音調で発音することに抵抗があると答えた。それぞれの音調の典型的形状は図 1, 2 に示すとおりである。図 1 では A 型述語「食べる」の「べ」にアクセントがあるためこの部分のピッチが高まり、その後下降して文末で再び上昇する。図 2 の B 型文では「つくる」のアクセントがある最終音節「る」

に上昇して下降する音調が見られる。

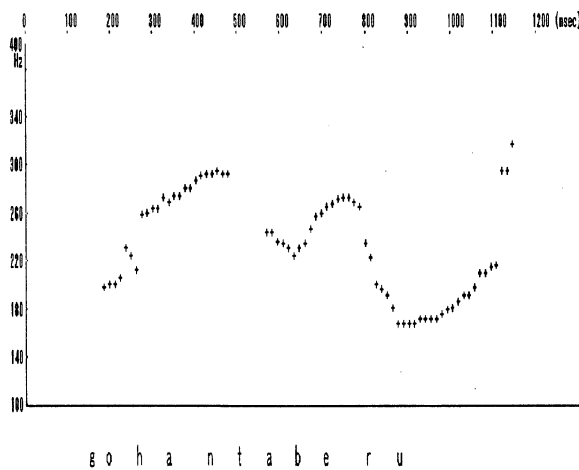


図1 A型文「ごはん食べる」の音調

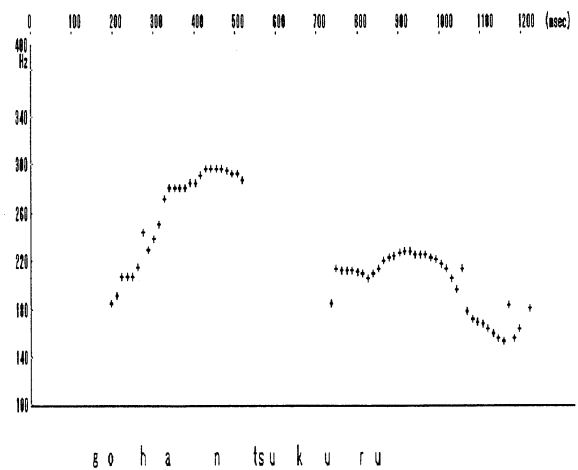


図2 B型文「ごはん作る」の音調

3.2. 仮説：音調とアクセントのかかわり

予備調査の結果からは、これらの二つの音調が鹿児島方言の疑問文音調の基本形ではないかと考えられる。つまり、ゼロ文末詞文の昇降音調はケの音調が広がったものではなく、「昇降調」とよく似た（もしくは同じ）形状がB型文に現れるのではないかとということである。ここから、若年層鹿児島方言の疑問文では述語のアクセントが文末音調の決定に大きな力を持つのではないかとという仮説を立てることができる。一方、木部が言うように、昇降音調がゼロ文末詞文にも広がっているとすれば、上昇音調をとまなうはずのA型述語の疑問文でも昇降音調の使用が認められることが予想され、この仮説は棄却される。

昇降音調をとるということにはもう少し説明を加える必要がある。図1、2を見ると、文末の音調は述語部分（本稿の場合は動詞）のA型B型いずれかのアクセントのあとに表示されることがわかる。この場合は上昇と昇降の二つの音調しか図示していないが、理論的には図3のような5つの音調パターンが可能だと思われる。しかしながら、実際に可能なのはa（A型音調）とb（B型音調）だけのようなのである。cとdは一度高い／低いところに上がった／下がった音調をさらに下げる／上げるという複雑な動きが要求されるし、このような音調は耳にすることがないのでたぶん使われないものと思われる。同じくeの場合もすでに上がっている音調をさらに上げるのは、強い驚きの表出など別の

理由がある場合には起こりうるかもしれないが、真偽の判定を求めるのに疑問文を用いる「無標の」状況ではあまり使用されそうにない。つまり、昇降型の音調をとるということは、A型文も述語のアクセントを含めてB型音調になることを意味する (cf. 6節)。

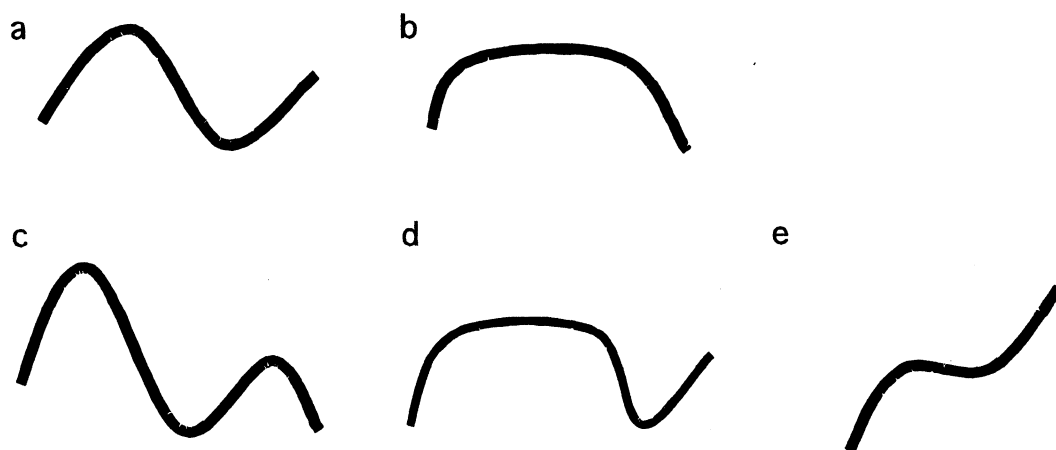


図3 可能な文末音調パターン

ただし、そのために本稿の議論が文末音調ではなくアクセントの問題を取り扱っているということにはならない。この問題はむしろ、文全体の韻律を決定するのに、アクセントが優先されるかそれともイントネーションが優先されるかという議論へとつながるものととらえることができる (cf. 杉藤1997)。つまり、音声的に独立した型として昇降音調を認めるのであれば、文末直前の述語のアクセントは犠牲になることもありうるかもしれない。そうすると、本来図3 aの音調のA型文が、図3 bの音調になるはずである。もしそうでなければ、述語のアクセントが文末音調の決定に関与するという見方が可能になる。これらの点を検証するために、実験音声の聴取による5種類のテストを行ったが、本稿ではそのうちの4つの結果をもとに考察を行う。

4. 大学生調査 (02年)

4.1. 調査の概要

調査は2002年1月、鹿児島市内の二つの大学の学生196名に対して、二回に分けて行った。今回の報告は、196名中一回しか調査に参加しなかった者、鹿

児島県以外出身者および鹿児島県の離島出身者をのぞく117名のデータを使った。被験者の性別および出身地別の人数は表1のとおり。

調査は、録音された実験用音声を聞かせて被験者に判断を求めるという音声アンケート方式による。調査項目は動詞述語疑問文の音調である。述語になりうるものとしては他にも形容詞や名詞があるが、今回は動詞のみを調査した。動詞は平山（1960）の鹿児島方言アクセントの記述をもとに、A型B型それぞれ二音節、三音節語を選び、さらに現在形と過去形を混ぜて提示した。アクセント型、音節長、時制などの要素が文末音調の決定に与える可能性がある

表1 被験者の性別・出身地別人数

	鹿児島市出身	鹿児島県出身	合計
男性	22	33	55
女性	31	31	62
合計	53	64	117

表2 テストAの結果

再生順	文	平山型*	平山型の選択率
24	服着た	A	70.94
35	ゴミ捨てる	A	71.79
11	雑誌読む	B	73.50
8	薬つける	B	74.36
4	英語習う	B	75.21
15	水汲んだ	A	76.07
10	何か頼んだ	B	76.92
19	テレビ見る	B	76.92
31	ミルク飲む	B	76.92
33	お湯わかした	A	76.92
21	料理作る	B	80.34
1	牛乳飲んだ	B	81.20
28	財布落とした	B	82.05
7	学校来る	B	82.91
14	ごはん食べる	A	83.76
34	前髪切る	B	83.76
30	雑誌見た	B	84.62
2	お金借りた	A	86.32
9	ごはん食べた	A	86.32
6	料理運ぶ	A	87.18
13	髪切る	B	87.18
17	免許取る	B	87.18
18	荷物運んだ	A	87.18
32	漢字書いた	B	87.18
38	たばこ吸った	A	88.03
12	着物着る	A	88.89
5	車乗る	A	89.74
36	絵の具塗る	A	89.74
23	髪染める	A	90.60
22	ラジオ聞く	A	91.45
25	ごはん作った	B	91.45
26	車借りる	A	93.16
16	休み取った	B	94.02
20	学校行く	A	94.02
3	おなか空いた	A	94.87
27	勉強する	A	94.87
29	雨止んだ	A	94.87
37	何か歌った	A	97.44

(*平山 (1960) に掲載されているアクセント型。以下「平山型」と呼ぶ。)

かもしれないと考えたからである。また、方言は口語的な言語使用なので、文の形で実験用音声提示される場合には（つまり後述のテストCをのぞいて）、すべて格助詞を省略した。調査に際しては、提示される文は疑問文であること、述語の末尾（文末と一致する）の音調に注意して判断すること、家族や友人とふだん使う言い方であると考えて答えること、などの点にあらためて注意を促し、回答を求めた。

4.2. テストA

実験用音声は、前部要素が名詞（目的格、主格、場所格）のみ、後部要素（述語部分）は動詞の、NP+VPの構造を持つ文である。このテストでは、文末音調を含む動詞述語部分が図3a（A型音調）、b（B型音調）の両方で発音された疑問文を聞かせ、上昇音調と昇降音調のどちらが自分がふだん使うものに近いかを判断させた。もし昇降音調が広がっているのなら、A型述語でも昇降音調が選ばれるものがあるはずである。実験文はA型音調が先に読まれ、B型音調が後にくるものと、その逆の順序のものを作り、再生順をランダムにならべかえた。³⁾ 表2はその結果である。表の「平山型の選択率」とは、平山に掲載されている動詞のアクセント型と同じもの（たとえば「着た」ならA型）が選ばれた割合を意味する。

この数字を見ると、選択率がもっとも低いものの二つはA型文だが、全体的にはB型文の方が判断の分かれる度合いが大きい（すなわち平山型と違うものを選ぶ者が多い）ことが分かる。t検定ではアクセント型のみで有意差が見られ（ $p < 0.05$ ）、音節数と時制では有意差は見られなかった。もし木部の言うように昇降音調が広がっているとすれば、A型文がB型音調で発音される傾向が見られるはずだが、A型文A型音調の選択率が平均87.5%、またB型文B型音調は82.1%で、むしろそれぞれの語アクセントと音調は平山型と同じものが選ばれる傾向にあると言える。

